医療を考える集い

1月18日に世羅町と議会が共催

世羅地域の医療を守り育てるために

全国的な医師不足の中、世羅地域の医療を守り、住民が安心して暮らしていくため、住民が望む地域の医療を自らが守り育む必要がある。行政・議会・住民さらには医療関係者が一体となって、これからの「世羅地域の医療を考える集い」を行政と議会が共催で、1月18日せら文化センターで開催した。

基調講演

講師
自治医科大学医学部
梶井英治 教授

私たちはこの10年間全国の地域医療を拝見してきた。各地で地域医療を守るという大きなウェーブが起きている現状を皆さんと共有し、自分たちの地域はどうか振り返って、何が必要か考えていきたい。

絵本「くまさん先生のSOS」は、医療を提供する医師と医療を受ける患者の状況をわかりやすく説明している。患者がコンビニ受診などで医師に過大な負担をかけないようにすることで、みんなが元気になるというもの。地域医療も限りある資源であり、大切にしていく必要があると訴えている。

西脇市では、おかあさんたちの活動で、地域医療を守る条例制定につながった。大切なことは、住民の理解と、一歩踏み出す行動力である。一人ひとり何ができるか考え、協働の「わ」を広げてほしい。

梶井先生

地域医療の現状と課題

世羅郡医師会
瀬尾泰樹 会長

医師会会員は、勤務医11名、開業医11名で、昨年診療所が2カ所開業された。看護職員不足や、後継者のめどなど、医業の継続が困難になっている。

今後地域医療は、救急医療体制の整備充実と、加速する高齢化社会に向けて地域包括ケア体制の構築が大きな柱になる。

救急医療を守るには、勤務医・開業医の垣根を低くし、地域の患者さんを医師全体でみていく体制が必要である。

在宅医療充実には小回りの利く開業医と福祉・介護・行政との連携を強め、バックアップに努めたい。

公立世羅中央病院
末廣眞一 院長

世羅中央病院は昭和28年に複数の町村の組合立病院として誕生した。その後、昭和56年には110床に増床され、以降、病院の新築がされるなど順調に推移していたが、新医師臨床研修制度により、大学から医師の派遣を受けることができず、当院は、当時13人いた医師は平成18年には5人になったが、33件の心肺停止患者の受け入れなど、過酷な時期を過ごした。

一方、平成17年には三原市立くい病院と経営統合し増築。現在155床の病院になった。広大から企業長を迎え、婦人科・耳鼻科・皮膚科の創設、脳外科医の常勤化など、医師12名で急性期医療に対応している。

これからは、住民に信頼され、開業医の先生と連携しながら良い医療を提供したいと考えている。

広島県の東部中央に位置する世羅中央病院は、地域中核病院として頑張っていかないと救急医療は崩壊してし

（左）瀬尾先生、（右）末廣先生

特集　世羅地域の

まうのではないかと思う。

現状に対するコメント

講師
自治医科大学医学部
神田健史助教

平成18年当時、末廣院長はじめ5人の医師で33件の心肺蘇生の患者を受け入れたお話は、医師として強い使命感と愛情があるからこそ踏ん張れたもので、先生方の努力に敬意を表する。

医療は、医療関係者・患者・住民が一緒になってこそできるもので、その器を行政が用意するものだということを理解して頂きたい。

医師の確保は、関係者と地域が一体となって医師を育てる時代になってきている。

全国では、シンポジウムの開催、ありがとうポストの設置、医局への差し入れや、住民が寸劇で病院へのかかり方などを伝える活動といった取り組みの事例がある。

地域医療を守るため住民ができることは、仲間をふやすこと、医療者にかかわること、医者が働きやすい環境をつくることなどがある。地域医療、地域社会をよくするためにまず一歩を踏み出してほしい。

神田先生

参加者からの意見

○病院の敷地内に花を植えたらどうか。
○病院ボランティアで車椅子の介助を行っているが、もう少し仲間が増えたらいい。
○病院内で読み聞かせなどのボランティア活動もできるのではないか。
○病院内に「あったかサロン」（老人クラブ）が開かれており、楽しんで参加している。
これからも続けて、いろんな催しものをやっていってほしい。

アンケート集約

参加してよかった（満足）

- 地域医療について考える機会になった。
- 世羅の現状・課題がよくわかった。
- 住民の意識を変える必要がある。
- 集いを継続してほしい。
- 他町から参加したが、今回の取り組みがうらやましい。
- 自分ができることをやりたい（病院ボランティアなど）。
- 地域の病院を大切にし、感謝の気持ちを伝えたい。
- 病院への受診のしかたを考える（適正受診）。

その他

- 参加者が少ないのが残念。
- もっとしっかり呼びかけを。
- もっと現状をアピールした方がよい。
- 意見交換が少なかった（一方通行）。
- 在宅療養に関する情報の窓口がほしい。
- 小地域での情報交換。